

ホラティウス『カルミナ』第 1 巻第 14 歌 ——船のアレゴリーについて——

岩崎 務

はじめに

1. 伝統的な解釈
2. 「船=女性」説
3. 「船=女性」説の問題点
4. 「船=国家」説の再考

終わりに

はじめに

O navis, referent in mare te novi
 fluctus! o quid agis? fortiter occupa
 portum! nonne vides ut
 nudum remigio latus,
 et malus celeri saucius Africo 5
 antennaeque gemant, ac sine funibus
 vix durare carinae
 possint imperiosius
 aequor? non tibi sunt integra lintea,
 non di quos iterum pressa voces malo. 10
 quamvis Pontica pinus,
 silvae filia nobilis,
 iactes et genus et nomen inutile,
 nil pictis timidus navita puppibus
 fidit. tu, nisi ventis 15
 debes ludibrium, cave.
 nuper sollicitum quae mihi taedium,

nunc desiderium curaque non levis,

interfusa nitentis

vites aequora Cycladas.

20

おお、船よ、新たな波がお前を海原へと
運び返そうとする。おお、何をしている。しっかりと
港に向かうのだ。見えないのか、
船べりは櫂を失い、
帆柱は疾い南西風にうたれて傷つき、
帆桁は呻き声をあげ、支え綱なしには
船体はあまりにも横暴な海に
とても耐えようも
ないのを。お前の帆はもう無傷ではなく、
再び災厄に苦しめられても喚ぶべき神もない。
お前が名高き森で産した
ポントウスの松を材とし、
役立たずの生れや名を誇ってみても、
怯えた水夫は色で飾った艫をいささかも
信用しはしない。お前は、風たちに
弄ばれないよう用心しろ。
少し前までは私の心をかき乱し、倦ませたが、
今は憧れにして、軽からぬわが思いを寄せるお前よ、
光り輝くキュクラデスの島々の間に
流れ込む海の潮を避けなさい。

上に示したホラティウスの『カルミナ』1.14は、船に向かっての呼びかけを内容とする詩であるが、クインティリアヌスが船をローマ国家のアレゴリーであると見なして以来¹⁾、伝統的に、内乱という嵐に揉まれてきた祖国が再びその危険に瀕していることを案じ、嵐を避けて港に向かうように警告している詩であると見なされてきた。そして、ホラティウスがこのアレゴリーのモデルとしたのはアルカイオスの詩であることも指摘されている²⁾。

国家という船について歌った政治的なアレゴリーの詩とする解釈が支配的であったわけだが、しかしながら、Mendellがこの解釈のもつ問題点を指摘し³⁾、さらには、Andersonがこの船は

国家ではなく恋をしている女性を喩えているのだとする見解を示した⁴⁾。そして、近年には、Knorr が国家のアレゴリーであるとする説を批判して、第 1 巻中の前後の詩に注目することによって、船が喩えているのは男性 2 人と三角関係にある若い魅力的なヘタイラであるという新説を発表した⁵⁾。しかし、共和政末期の激動の時代のローマ国家を意味しているとする従来の見解もまだ根強く、この問題については依然決着はついていないと言える。

本論では、1.14 の船が何を喩えているかという問題について、これまでの議論を再検討し、とりわけ、定説に反論する Knorr らの考察の妥当性を検証することによって、一定の結論に至ることを試みる。

1. 伝統的な解釈

まず、この詩が国家という船を歌っているのであり、「新たな波」と嵐は内戦を、港は平和を意味するとされてきた根拠について確認しておく。船が実際の船ではなく暗喩であると考えられるのは、17-8 行の詩句における詩人の溢れるばかりの心情がこめられた呼びかけが最大の理由である。かつては詩人の心に不安や不快をかき立てたのが、今では愛情をもって気にかける対象となっていると言われる船は、ただの船ではありえない。そして、この詩を、内戦という災厄に苦しめられてきたローマが、平穏を得たと見えたのも一時のことで、再び内戦へと向かおうとしている状況のアレゴリーとして読めば、*novi fluctus* (1-2), *imperiosius aequor* (8-9), *iterum* (10) は内戦とその再発を、*Pontica pinus* (11), *nobilis* (12), *genus et nomen inutile* (13), *pictis ...puppibus* (14) などの言葉はローマ国家の栄えある由緒と外面的な光輝を、*fortiter occupa portum* (2-3) は平和を維持して内戦に突入することを思いとどまる強さをもつことを意味するものとしてよく理解できる。

『カルミナ』にはアルカイオスの詩を手本としたものが多くあるが、1.14 についても、アルカイオスの詩の断片との類似が見られ⁶⁾、ホラティウスがこのギリシア詩人に倣って作ったことを推測させる。そしてこのことも 1.14 をアレゴリーとして解釈する根拠となっている。まず、1.14 との類似の詩句が指摘されるのは、アルカイオスの断片 6 (L.P.) である。この断片中の *τὸ δ' αὖτε κύμα τὼ προτέρω νέμω / στείχει* 「この波が再び (以前の波のように?) やって来る」や、*ἐς δ' ἔχυρον λίμνα δρόμωμεν* 「我々は安全な港へ急ぎ向かおうではないか」という語句は、ホラティウスの *novi fluctus* 「新たな波」や *fortiter occupa portum* 「しっかりと港に向かうのだ」を想起させるものであり、この断片は欠損箇所が多いが、確かに、両詩には酷似したところがある。さらに、「以前の困難を思い出せ」、「高貴な父祖たちの名を汚さぬように」、「暴政」などの言葉もあり、これらはアルカイオスのこの「船」が国家という船であることを示している。

アルカイオスには 1.14 と関連があると思われる詩として、さらに次に示す断片 326 (L.P.)

がある。

ἀσυννέτημι τῶν ἀνέμων στάσιν·
 τὸ μὲν γὰρ ἔνθεν κύμα κυλίνδεται,
 τὸ δ' ἔνθεν, ἄμμες δ' ὄν τὸ μέσσον
 νᾶι φορήμμεθα σὺν μελαίνα
 χείμωνι μόχθεντες μεγάλα μάλα·
 πὲρ μὲν γὰρ ἄντλος ἰστοπέδαν ἔχει,
 λαΐφος δὲ πᾶν ζάδηλον ἤδη,
 καὶ λάκιδες μέγαλαι κατ' αὐτο,
 χάλαισι δ' ἄγκυραι, ...

私には風の方向がわからない。波が今はこちらから、今はあちらからとうねり寄せ、我らはそのただ中を黒い船とともに運ばれていくのだ、この大嵐にひどく難儀しながら。ビルジ水がマスト受けにまで満ち、帆はすでにすっかり光を通し、至るところに裂け目がある。錨はゆるんで...

やはり嵐に揉まれてすでに損傷している船が歌われていて、四方から押し寄せる波と裂けてしまった帆の描写は、ホラティウスの詩の波と「無傷ではない帆」(9)への影響を思わせる。そして、すでに古代においても、『ホメロスの諸問題』の著者であるヘラクレイトスは、僭主によって引き起こされる大変動をアルカイオスが嵐の海の状態に喩えていると述べ、アレゴリー的な解釈を取っている⁷⁾。国家の船という喩えは、実際、古代の詩においては特別なことではなく、しばしば用いられてもいる⁸⁾。アルカイオスの船の詩との類似性が認められる1.14は、もとのギリシア詩がそのように理解されているのと同様に、政治的な動乱に揺れる国家を、嵐に遭遇して破損し危機的な状況にある船によってアレゴリー的に表わして、詩人の強い懸念を表明している詩であると解釈されてきた。

2. 「船=女性」説

国家の船というアレゴリー的な解釈が一般的に受け入れられてきたが、これに対して早くに異論を投げかけたのがMendellである。そしてその後、Mendellの議論を基にしながらAndersonが、1.14の船の象徴しているのはローマ国家ではなく、詩人の恋人である女性であるとの説を発表した。Andersonたちは古代文学における船による国家の暗喩の例を検討し、それらの例に共通して見られる欠かせない要素を指摘した。その要素とは、まず、強調点は操舵手と彼の操

船に置かれていて、船自体は自らを操作することはできない無生物として扱われているということである⁹⁾。また、このアレゴリーを用いている語り手は、船＝国家の状態が気にかかっている場合には、自分自身をこの船の乗組員と見なして、船上の視点から述べている。そして、どの例においても、国家の暗喩であることが明確にわかるような手掛かりとなる表現がある。ところが、ホラティウスの詩に当てはめて考えてみた場合、これらの要素はまったく見られない。操舵手や船長についての言及はなく、船に呼びかけている語り手は、船を人間のように扱い、自己の成り行きに対して責任がある存在と見なしている。「おお、何をしている」(2) という呼びかけが端的に示しているように、船は自らの意志を持ち、自分の行き先を決定することができる。また、語り手の位置については、船のことを *desiderium* 「憧れ」、*cura non levis* 「軽からぬ思い」(18) の対象とし、大いに気にかけているのにもかかわらず、陸地から、あるいは少なくとも船外から船を見て呼びかけている。そして *navita* 「水夫」(14) は語り手自身と重なるのではなく、3 人称で扱われている。さらには、内戦に再び突入しようとするローマを船が表わしていることをかなり明瞭にするような語句というものも見当たらない。このように国家という船のトポスが必須としている要素を 1.14 はまったく備えていないことから、ホラティウスの詩の船が国家であることは否定すべきであるという主張がなされた。

船が国家であることを否定する研究者たちも、船がただ実際の船を描写しただけのものではなく、何かの暗喩、あるいはアレゴリーとなっていることは認める。Anderson は、Mendell の「人生という船」という解釈は退けて¹⁰⁾、アレゴリーのいくつかの可能性の中から、船は語り手の女性の恋人に重ねられ、嵐の海は恋愛を表わしていると結論づけている。1.14 における船の徹底した擬人化を指摘した上で、Anderson は、語り手が船を自己決定のできる自立した存在として扱っていること、船の女性性が強調されていること、語り手と船は切り離されていて、語り手の恋しい気持ちが強く表現されていること、などの理由から、船は、恋人である語り手を捨てて、新たな恋愛を求めて去って行く遊女であると考え。最後のスタンザの熱情のこもった言葉 (*taedium* 17; *desiderium, cura* 18) も、ローマの恋愛詩において恋人に対してしばしば使われる常套的な文句であり¹¹⁾、そのままに恋の熱情を表わしているものと受け取れるとする Anderson は、多くの恋愛を経験してきた遊女である船が、語り手という港を離れて恋愛という海に再び乗り出していくということのアレゴリーであると見なしている。

Knorr は、1.14 の船が女性であるとする Anderson の説を支持しながらも、船は新たな航海に乗り出そうとしているのではなく、1 つの旅の終わりにあつて港に近づこうとしていると解釈すべきであるとし、また、ホラティウスは年取った女性に対する愛情はほとんど示すことがなく、その抒情詩では、性的に活発な熟年の女性は嘲笑の対象とされるのが一般的であることから、詩人が経験豊かな遊女に熱烈に求愛しているとは考えられないと論じている¹²⁾。そして、

1.14の前後にある第1巻の一連の詩との関連性に特に注目している。まず、1.14と同じく第3アスクレピアデス風スタンザで作られている1.5について、語り手がかつての恋人であったピュッラという女性に呼びかけて、彼女の現在の若い恋人が彼女の正体をまだ知りたくないことを憐れんでいるこの詩は、『カルミナ』において恋愛を歌った最初の詩であり、プログラム詩の1つとして、第3アスクレピアデス風スタンザを性的なテーマを扱うのに適した韻律であると予め定めていると見なす。また、韻律以外にも、語り手を含んだ恋愛の三角関係が示されていること、恋愛の海という暗喩が用いられていることなど、後の1.14で繰り返される特徴が見られることを指摘している¹³⁾。さらに、やはりリュディアという女性と若い男の恋に語り手が嫉妬するという三角関係が歌われている1.13が、1.14の直前にあって1.5と言葉や内容において類似点を持っているだけではなく、この詩には、若い男の暴力など、1.14の中に見出しうる新たなモチーフも現れていることも明らかにしている。これらの考察から、Knorrは、1.14とこれに先行する2つの恋愛詩とを結びつけている共通の要素が、1.14を、これも詩人の恋愛の三角関係を歌った、船によるアレゴリーの詩であると確実に理解させるように読者を導いていると見なす。さらに加えて、1.14の後に続く3つの詩、すなわち、ヘレネをメネラオスから奪ったパリスを歌う1.15、ある女性へのパリノーディーアである1.16、テュンダリスという名の遊女に宛てた1.17は、やはりいずれも恋愛の三角関係を含みもっていることをも考察している。そして結論として、これら男女の三角関係を変奏している第1巻の一連の詩の間に位置づけられることによって、1.14は、若い魅力的な女性と、彼女を賛美する2人の男性との間の関係を基にして作られたアレゴリーの詩であり、2人の男性の一方は若い情熱的な求愛者で、もう一方は語り手である、より落ち着いた恋の経験豊かな男であると解釈している。

3. 「船＝女性」説の問題点

船が国家であるとする根拠の重要なものは、ギリシア文学以来のこの比喩の伝統である。しかし、同時に船で女性を喩えている例も伝統的に見られるし¹⁴⁾、実際、ホラティウスが倣っているアルカイオスにもそのような断片が見つまっている¹⁵⁾。従って、1.14だけを見て船が何の比喩となっているかを論じるのでは、この詩の創作時期やそのときの社会的状況が明らかになっていない以上、論者の見解は明確な根拠を持ち難く、主観的な判断にならざるを得ない。その点からすれば、Knorrの議論は、詩集の第1巻におけるいわば文脈を見るという新たな観点を提示し¹⁶⁾、その根拠を得ているので、説得性を持つと言えるだろう。アウグストゥス時代の詩人たちが詩集における詩の配置に意を用いたということは明らかである。

Mendell 以来の議論があり、とりわけ Anderson や Knorr の論考によって、船が女性を表わすという主張は以前のように簡単に退けてしまうことはできなくなっているだろう¹⁷⁾。しかし

ながら、この見解にもまだ問題が伴っている。それは、Jocelyn の指摘するところで、今度は女性を船で喩えている場合の共通する特徴である¹⁸⁾。すなわち、このような比喩はギリシアとローマの文学のどちらにも多くの作品に見つけることができるが、1 つの共通した調子を帯びているのが認められる。その調子とは、船と同一化されている女性に対して、同一視している者は一般的に好意的ではない、むしろ敵対的な態度を示しているということである。

Jocelyn は、Woodman が自説を根拠づけるために引用している 3 つのエピグラム（ルフィヌス作、メレアグロス作、アスクレピアデス作）を取り上げて、どのエピグラムもよく知られた老練な遊女に関連していて、彼女に「乗船」する「水夫」は金銭的な「難破」の危険を冒すことになることを警告していることを述べている。ローマ文学においては、女性を船と同一化していることが明瞭な例は喜劇とエレゲイア詩にしか見られないようであるが、やはり、ギリシア文学におけるのと同様な調子が認められる。Jocelyn が挙げているローマ文学からの幾つかの例の中に、プラウトゥスの『メナエクス兄弟』で用いられている船の比喩がある。奴隷のメッセニオは到着した異国の町で商売女エロティウムの家の前にやって来ると、「その港には今、海賊船が泊まっています。用心しなきゃいけませんぜ。」(344-5) と自分の主人メナエクスに忠告し、後に主人が女の誘いに乗って家に入っていくときには、「海賊船が小舟を引きずりさらちまった。」(442) と嘆いて、ともに女に対して海賊船 (*navis praedatoria*) という暗喩を用いている¹⁹⁾。その間、女と出会った主人はこんなやりとりをしている。

ERO. . . , quam tu mihi nunc navem narras? MEN. ligneam,
saepe tritam, saepe fixam, saepe excussam malleo;
quasi supellex pelliionis, palus palo proxumust.

エロティウム：...、あなたがおっしゃっている船って何なの？ メナエクス：木造船さ。何度も穴が開き、何度も槌でぶったたかれた代物さ。まるで皮なめし屋の仕事道具みたいに、木の釘がびっしり並んでるよ。(402-4)

相手をもう 1 人の双子の兄弟と取り違えているエロティウムは、船から降りてここへ来たと言われたのに対して、自分の知るメナエクスは船に乗るはずはないと思って、上のように問いかけている。エロティウムは相手がすでに別の女と楽しんだと疑って、「船」に海賊船、すなわち商売女の意味を含ませて尋ねている。答えるメナエクスはそのような相手の心のうちはわからないので、自分が乗ってきた船が長い航海を経て、何度も傷んで修理を繰り返してきた古船であるとそのまま素直に答えている。しかし、メナエクスが説明する船は裏の意味を持ちうるのであって、エロティウムと、そして観客にとっては、たくさんの客を取ってきたベテラ

ン遊女を想起させ、また、メナエクスがここで使っている言葉は性的な連想をさせるものでもある²⁰。プラウトゥスはこのようなある種の言葉遊びによって観客の笑いを誘っている。

メナエクスが表現するこのような航海であちこちに損傷を受けた船は、『カルミナ』1.14で描写される船の姿にも通じる。従って、もし1.14の船が女性、とりわけ遊女を喩えているとするならば、読者には、このトポスの表現の通例からして、経験豊かで男にとっては危険な手練手管の女を喚起することになるだろう。Knorrが考える若い魅力的なヘタイラにはそぐわないことになる。その点では、Andersonが考える再び恋愛へと向かう年取った遊女は、この船が喩える対象としてふさわしい。しかしながら、Jocelynが指摘し、またKnorrも述べているように、このような女性は船に喩えられるとき、好意的な目でみられることはなく、愛情よりも嘲笑の対象とされるのが一般的である。そうであれば、最後のスタンザでの船に対する語り手の呼びかけ (*desiderium, cura*) に感じられる真摯な思慕の情と釣り合わなくなってくる。国家の船による比喩表現に通例の要素の点から、1.14の船=国家の見方が否定されるように、遊女の船による比喩表現に一般的な特徴の点から、船=恋する女の見方も否定されることになる。

4. 「船=国家」説の再考

ここで、1.14が政治的なアレゴリーの詩であるという見解のほうに立ち戻ってみたい。そして、アルカイオスの詩との類似性や文学的伝統という観点からは離れて、ホラティウスの他の抒情詩との比較によって、国家の船という解釈の可能性を検討する。

いわゆる政治詩で1.14との比較が可能なものとしては、詩人によって航海についての言及がなされるという共通点を持っている初期の政治詩『エポデー』第16歌（以下 *Epod.16*）がある。この詩は語り手がローマ市民たちを前にして演説を行なうという仮構になっていて、内乱を続けて自ら破滅へと向かっているローマの現状に絶望した語り手は、祖国を捨てて海の彼方へ船出することを市民たちに訴える。これまでどの異民族によっても征服されることがなかったローマを「呪われた血の世代」(9)の我々が滅ぼそうとしていると述べた後で、語り手は、かつてポカイアの市民たちがしたように祖国から脱出しようと提案し、返答を求める。

sic placet? an melius quis habet suadere? secunda

ratem occupare quid moramur alite?

その通り賛成するか。それとも誰かもっとよい考えを持っているか。鳥の予兆も吉であるのに、どうして我らは乗船をためらうだろうか。(23-4)

そして向かう先は「至福者の島」である。

nos manet Oceanus circumvagus: arva beata

petamus, arva divites et insulas,

取り巻き流れる大洋が我らを待っている。幸せの土地を我らは目指そう、富める島々の土地を。(41-2)

1.14 では語り手は航海を終えて、もしくは取り止めて入港することを忠告しているのに対して、こちらでは出港して航海に乗り出すように促している。方向はちょうど逆であるが、両詩はともに船出をめぐる強い促しの呼びかけをしている。『エポデー』には、第 16 歌と近い時期に作られたと思われるやはり政治的な詩である第 7 歌がある。この詩においても自滅しつつあるローマに対する憂いと非難が表現され、冒頭で詩人は、*quo, quo scelesti ruitis? aut cur dexteris / aptantur enses conditi?* 「どこへ、どこへお前たちは邪悪にも突き進むのか。どうして一度納めた剣をその手に構えているのか。」(1-2) と詰問しているが、これは 1.14 のやはり冒頭の *o quid agis?* 「おお、お前は何をしている。」(2) という問いかけと類似した切迫した調子を感じさせる。1.14 は『エポデー』のこれら 2 つの政治詩を想起させるということは言えるだろう。

船や航海についての直接の言及はないが²⁰⁾、*Epod.16* と同じく、内乱という罪を犯しているローマ人の有様を述べ、神々の怒りがすでに示されたことをも警告しているもう 1 つの詩が『カルミナ』1.2 である。これら 2 つの詩については、前者の精神と形式が後者に受け継がれていて、幾つかの共通点があることが指摘されている²²⁾。特に詩全体の構成が類似していることが注目され、1.2 は、ローマの内乱の現状を描く前半 (1-24) と神々に救済を祈願する後半 (25-52) から成り立っているが、*Epod.16* のほうも、内乱に対する憂慮を表わした部分 (1-14) とこの苦境からの脱出を考える部分 (15-66) に分かれていて同様である。ここで、全体の行数は少ないが、1.14 の全体構成を比べてみれば、分量的なバランスは *Epod.16* とは逆になる形で、やはり、すでに嵐によって傷ついた船の現状を描く部分 (1-15a) と安全を確保するための忠告の部分 (15b-20) に分かれていて、同様な構成になっていることがわかる。

さらに *Epod.16* の 1-14 を詳しく見れば、その中には異民族に征服されたことがないというローマの過去の栄光に目を向ける部分 (3-8) が含まれているが、1.14 の場合にも、1-15a の中には船のいわば秀でた血統や栄えある姿について述べる部分 (11-15a) が含まれていて同様な形式と内容を認めることができる。一方、1.2 と比べた場合には、この詩には前半部分に神々の怒りを示す予兆についての言及があった上で、後半部の最初で *quem vocet divum populus ruentis / imperi rebus?* 「崩壊しようとする支配の命運のために、国民はどの神を喚ぶべきか。」(25-6)

と語り手は問いかけているが、1.14においても、「再び災厄に苦しめられても喚ぶべき神もない。」(10)と神の救済が考えられ、しかしこちらでは否定されている²³⁾。ここまで検討してきたように、1.14は、Epod.16と、そして延いては1.2と構成上の顕著な類似点を持っている。

1.14とEpod.16の間には、用いられている語句の点でも類似性を見出すことができる。それぞれの詩の、船に与える、また、市民たちに与える忠告の要の言葉は、*fortiter occupa portum*「しっかりと港に向かえ。」(2-3)と*ratem occupare quid moramur*「どうして我らは乗船をためらうか。」(24)になっている。一方は港、もう一方は船であって、目的語は異なるが同じ動詞*occupo*が共通して使われている。また、1.14の*fortiter*に対しては、Epod.16では「至福者の島」を目指すことを促す相手として、第39行で*vos quibus est virtus*「勇気のある君たち」を特に挙げていて、言葉の対応が認められる。

終わりに

1.14の船の比喩についての以上の考察から、女性を指すとする説には、船による遊女の暗喩に一般的な特徴と合致しないところがある点で問題があり、国家を指すとする説の再検討では、内乱のローマに対する詩人の思いを歌ったEpod.16および1.2との構成あるいは語句の点での類似性が確認できた。1.14を含む『カルミナ』第1巻の関連づけられた一連の詩のグループに関するKnorrによる指摘と各詩の分析はたいへん興味深いですが、1.14の船が若い魅力を持った遊女であるとする根拠はそれほど強固であるとは思われない。本論は、Epod.16および1.2との関連、とりわけ前者との類似点を重く見て、1.14はやはり内戦のローマ国家に呼びかけられたアレゴリーの詩であるとする解釈のほうに傾く。

船の操縦者についての言及がなく、船が擬人的に自己決定できる存在として扱われていることや、語り手の位置が船外もしくは陸上にあることなど、Mendell以来批判されてきた問題は本論では必ずしも解消されてはいないが、1.14を政治詩として見た場合、この詩は、内戦を繰り返すローマに対する詩人の位置と態度の点で、Epod.16と1.2の間にあるものと考えられるのではないだろうか。ピリッピーの戦いで共和派軍に加わり敗北を経験したホラティウスは、恩赦によってどうにかローマに戻ることはできたが、祖国の現状に対する憂慮や怒りは強く、ローマ社会に対してはまだ否定的な態度しかとりえず、それがEpod.16のような早い時期に作られた詩には反映している。従って、Epod.16の船は、ローマを捨てて海の彼方に神話的な理想郷を求めようとする船である。しかし、1.14が作られたときには、ホラティウスを取り巻く状況と政治的な状況に変化が生じていたのであろう。少し以前には詩人にとって*solicitum taedium*であったローマが、今や*desiderium*であり、*cura*ともなっている。そして、Epod.16とは逆に、海に出て行くのではなく、港に戻れという現実的な忠告をしている。しか

しながら、詩人は共同体の一員に完全に復帰することはできていなかったのであろう。従って、船に呼びかける語り手の位置はいまだ船外にある。他方、1.2 は、さらに状況が変化し、内戦の終結に少し希望を見出し、新しい指導者への期待が強まってきた頃の詩人の心情を反映しているのであろう。ローマの現状に神々の怒りを見ながらも、詩人は神の救済をも考えることができているのであり、詩の最後では、メルクリウス神の成り代わりとして指導者オクタウィアヌスに向かって懇願の呼びかけがなされている。しかし、船には「喚ぶべき神もない」と言われるような状況の 1.14 においては、まだ楽観は許されず、確たる信頼を寄せることができるような国の新しい指導者の姿は明瞭に見えてはいなかった。従って、この詩では船の舵取りについての言及がないのである。1.14 が国家を船に喩えるトポスに通例見られる諸要素を欠いていることについてはこのように考えることができるのではないだろうか。

注

- 1) 『弁論家の教育』8.64 でクインティリアヌスはアレゴリーの例としてこの詩を挙げ、「ホラティウスは国家に代えて船を、内戦に代えて波と嵐を、平和と調和に代えて港を言葉としては用いている。」と述べている。
- 2) Fraenkel 1957: 158; Syndikus 1972:168.
- 3) Mendell 1938: 147.
- 4) Anderson 1966: 87-90.
- 5) Knorr 2006: 154-161.
- 6) Nisbet and Hubbard 1970: 180.
- 7) アルカイオスの断片 208 (Campbell=326 L.P.) を参照。
- 8) Mendell 1938: 147; Nisbet and Hubbard 1970:180f.
- 9) Anderson 1966: 88.
- 10) Anderson 1966: 90-92. 船は詩のアレゴリーであるとの可能性も退けている。
- 11) これらの語彙の性的な含意については、Commager 1962: 167 n.12 参照。しかし Commager はホラティウスの政治的な立場を反映して使われている言葉と見ている。
- 12) Knorr 2006: 153.
- 13) Knorr 2006: 155.
- 14) Anderson 1966: 93-95 は、テオグニス 457-460、カトゥッルス 64.97-98 などを挙げており、Woodman 1980: 62-63 はさらに、ルフィヌス (*Anthologia Palatina* 5.44)、メレアグロス (*Anthologia Palatina* 5.204)、サモスのアスクレピアデス (*Anthologia Palatina* 5.161) の 3 つをこの種の詩であるとしている。
- 15) アルカイオスの断片 73 (L.P.) もこれまで嵐に打たれてきた船のことを語っているが、断片 306 (Campbell (i) columns i and ii) が前者の注釈であろうと推測されていて、この注釈の内容からも、断片 73 (L.P.) の船は詩人とかつて関係のあった女性、恐らくは遊女を表わしているとの解釈がなされている。 cf. Anderson 1966: 97; Woodman 1980: 61-62.
- 16) Woodman 1980:67 は、1.14 と前後の詩との関連性とそれが生み出すアイロニーについて述べており、詩集における小さな範囲での文脈に触れてはいる。
- 17) 例えば、Nisbet and Hubbard 1970: 180 は、Anderson の説を“strange theories”の 1 つとして特に論評を加えることをしていない。
- 18) Jocelyn 1982: 333-335.
- 19) 『メナエクムス兄弟』からの引用和訳は、拙訳 (『ローマ喜劇集 2』、京都大学学術出版会、2001 年) による。
- 20) Marsilio 1988: 134-138.

- 21) 墮落した人類に怒ったゼウスが引き起こした大洪水とデウカリオンの箱舟の神話が引用されているので、この詩にも船のイメージが含まれているとも言える。船を建造して乗り組み、破滅から逃れて人類を再生させることになるデウカリオンは、詩の終りでローマの守護者として呼びかけられているカエサル（オクタウィアヌス）を予め暗示していると考えられるかもしれない。
- 22) 中山 1976: 158-160 は、『農耕詩』第1巻の影響が従来から指摘されているが、Epod.16 との関係のほうをより重視している。
- 23) もっとも 1.14 のこの神は、航海の安全のため船尾に据えられていた神像という具体物を指す。すでに暴風によって折れて失われている。 cf. Nisbet and Hubbard 1970: 185.

参考文献

- 中山恒夫 1976
『詩人ホラティウスとローマの民衆』、東京。
- Anderson, William S. 1966
“Horace Carm. 1.14: What Kind of Ship?” *Classical Philology*, 61: 84-98.
- Campbell, David A., ed. & tr. 1982
Greek Lyric I: Sappho and Alcaeus. Cambridge / London.
- Commager, Steele 1962
The Odes of Horace. A Critical Study. New Haven.
- Fraenkel, Eduard 1957
Horace. Oxford.
- Jocelyn, H. D. 1982
“Boats, Women, and Horace *Odes* 1.14.” *Classical Philology* 77: 330-35.
- Knorr, O. 2006
“Horace’s Ship Ode (*Odes* 1.14) in Context: A Metaphorical Love-Triangle.” *Transactions and Proceedings of the American Philological Association*, 136: 149-169.
- Lobel, E., and D. L. Page, eds. 1955
Poetarum Lesbiorum Fragmenta. Oxford.
- Marsilio, Maria S. 1988
“Two ‘Ships’ in the *Menaechmi*.” *Classical World* 92: 131-159.
- Mendell, Charles W. 1938
“Horace I. 14.” *Classical Philology* 33: 145-56.
- Nisbet, R. G. M. and Margaret Hubbard 1970
A Commentary on Horace: Odes Book I. Oxford.
- Syndikus, Hans Peter 1972
Die Lyrik des Horaz. Eine Interpretation der Oden. Bd. I: Erstes und Zweites Buch. Darmstadt.
- Woodman, A. J. 1980
“The Craft of Horace in *Odes* 1.14.” *Classical Philology* 75: 60-67.

Horace *Carmina* 1.14: A Reconsideration of the Allegorical Ship

IWASAKI Tsutomu

Many of modern scholars have accepted Quintilian's interpretation that the ship in *C.* 1.14 is an allegory of the state. Their general argument is that this ode is modeled on one poem of Alcaeus (frag. 326 L.P.) and that Alcaeus' poem is able to be considered to picture the state in distress allegorically. Mendell, however, reviewing the general practices of Roman writers in the matter of sea figures, thought that Horace's ship is unlikely to be "the Ship of State". Then Anderson more effectively pointed out the inadequacies of the traditional interpretation and concluded that the ship symbolizes a woman, probably an experienced courtesan. Recently Knorr, reading the ode in the context of the First Book of *Carmina*, suggested that the ship is an attractive young hetaera faced with a love-triangle.

Now the suggestion that the ship is an allegory of a woman in love is impossible to turn down easily. However, this interpretation also has some problems. As Jocelyn pointed out, many examples of identification of a woman with a ship which are able to be found in Greek and Latin literature have a single common tone. The identifier is always hostile and doesn't have warm affection to the woman identified. Accordingly, the affectionate language of the ode's final stanza is out of tune with the feature general to the figurative expression of "the Ship of Love".

If we consider the ship is an allegory of the state, *C.* 1.14 is similar in composition to *Epodes* 16 which is one of the early political poems and in which the poet suggests setting sail from Rome for the Islands of the Blest. Both poems describe the present state of Rome, contrasting it with Rome's past glory, in the first half and suggest a method for avoiding misfortune in the latter half. We can also find the same composition in *C.* 1.2 in which the poet deplores the Romans' crime of civil war. Additionally *C.* 1.14 and *E.* 16 have verbal echoes such as 'fortiter occupa portum' (*C.* 1.14.2-3) and 'ratem occupare quid moramur' (*E.* 16.24). In conclusion, by paying heed to the structural and verbal similarity of *C.* 1.14 to *E.* 16, we advocate the traditional interpretation that Horace's ship represents the state.